

# 釜山浦と機張の上長安窯址

李 泰勳<sup>1</sup>

<sup>1</sup>非会員 文博 九州産業大学国際文化学部国際文化学科（〒813-8503 福岡市東区松香台2-3-1,  
E-mail:tehun@ip.kyusan-u.ac）

本稿では、15・16世紀に朝鮮政府が日本船の到泊港として指定していた浦所のうち、もっとも長い期間使用されていた釜山浦をとりあげ、当該期の日朝交流におけるその役割について概観した。また近年、釜山の東端に位置する機張地域では古窯址に対する地表調査や発掘調査が積極的に行われ、15・16世紀の遺物が多く収集されている。本稿では、機張の上長安窯址の遺物を検討し朝鮮陶磁をめぐる日朝間の相互交流の一端を考察した。

キーワード:釜山浦, 機張, 長安, 粉青沙器, 対馬

## 1. はじめに

韓国の慶尚南道沿岸は古代から日本との文化交流が盛んに行われた地域である。とりわけ釜山は、中・近世の対日窓口である朝鮮政府の指定港（浦所）と倭館が設けられていた地域である。

近年、釜山の東端に位置する機張郡の長安邑奇龍里山120番地一帯に陶芸村造成事業にともない、周辺地域における古窯址に対する地表調査や発掘調査が行われ、15・16世紀の日朝陶磁交流を考察する上で大変興味深い報告が行われている。<sup>1)</sup>

本稿では、中・近世の対日窓口であった釜山浦と倭館の変遷を概観した後、機張地域の古窯址のなか、上長安窯址の粉青沙器関連遺物に焦点を当て、当該期の日朝陶磁交流の一端を探ってみたい。

## 2. 中・近世の釜山浦

### (1) 浦所と倭館の制定背景

1350年以降、14世紀末にかけて倭寇による被害が甚だしくなっていた高麗では、日本の中央政府に対する外交交渉を行うとともに独自に様々な倭寇対策を講じた。その中核をなしていたのが平和裏に通交する日本人を優遇する〈倭寇懐柔政策〉であった。幕府將軍をはじめ、有力寺社、諸大名、倭寇の棟梁、辺境地帯の人々に至るまで多角的な朝鮮通交が行われていたが、いずれも公・私貿易による利益追求、あるいは経済援助を高麗・朝鮮側に求めるためであった。朝鮮側は〈小中華思想〉に基づき、通交者の大部分を夷狄とみなし徳を広める対象として対応した。

1392年に建国した朝鮮王朝も高麗の倭寇対策を継承し、通交倭人に対する経済的な支援を惜しまなかったことが功を奏し、倭寇は下火になっていった。かつての倭寇が

平和な通交者と化して朝鮮通交を行うようになったのである。

とりわけ、朝鮮半島と地理的に近接している西日本地域、なかでも北部九州からの通交者が主流をなしていた。

当該期、朝鮮へ渡航した日本人は大きく使送倭人（客倭）と興利倭人に分けられる。前者は何らかの使命を帯びて渡航した使節であるが、後者とともに主な渡航目的は交易を行うことであった。興利倭人の船を興利倭船というが、朝鮮側の史料によれば「魚塩雑物と売船」とも記されており、<sup>2)</sup>主に対馬の人々が魚塩をもたらし、朝鮮の米穀と交易を行っていた。<sup>3)</sup>



図-1 朝鮮の浦所と倭館の位置

\*①15・16世紀の釜山浦、②薺浦、③塩浦、④絶影島、⑤豆毛浦、⑥草梁倭館、⑦洛東江

日本船は当初、朝鮮の南部沿岸どこへでも渡航し、交易活動が許されていたが、15世紀はじめに朝鮮政府が治安上・国防上の理由から、まず興利倭人に対して1407年頃に鎮海の薺浦（乃而浦）と富山浦（釜山浦）への停

泊を義務化し、使送倭人に対しては1419年の応永の外寇（己亥東征）直後に興利倭人と同じく両浦への停泊を義務付けた。<sup>4)</sup>

その後、1426年に対馬の実力者であった早田左衛門太郎が慶尚道の巨濟島に農地を賜うことと慶尚左・右道の各浦に任意に停泊し、交易活動ができるように許してほしいと請願した際、その要請は退けられたが、蔚山の塩浦が（浦所）として追加された。<sup>5)</sup> これで図-1に示す地域に（三浦）が制定されたのである。

## (2) 15・16世紀の釜山浦

日本人通交者に対する朝鮮政府の指定港（浦所）が三浦に制限されると三浦に日本人の停泊が集中した。浦所における交易が栄えると交易活動が終わっても帰国せず、住み着く倭人が増えていった。これを恒居倭というが、表-1のように15世紀半ばから増加の一途をたどり、15世紀末頃には3,000人を超え、倭人集落が形成されていた。

表-1 三浦恒居倭戸口一覽

年度	齊浦		釜山浦		塩浦	
	戸	口	戸	口	戸	口
1466	300	1200余	110	330余	36	120余
1475	308 寺 11	1731	88 寺 3	350	34 寺 1	128
1494	347 寺 10	2500	127 寺 4	453	51	152

\*中村栄孝『日本と朝鮮』（至文堂、1966）、村井章介『中世倭人伝』（岩波新書、1993）を参照し作成した。

恒居倭は浦所近海における釣魚、周辺地域を開墾し耕作、周辺住民との交易、密貿易を含む日朝貿易の斡旋などで生活を営んでいた。<sup>6)</sup> 彼らは朝鮮半島にもっとも近い対馬出身者で、対馬島主宗氏の支配を受けていた。<sup>7)</sup>

浦所には年間数千人の日本人が渡航した。例えば、1455年の1年間に使送倭人6,116名が来朝したほか、<sup>8)</sup> 興利倭人や恒居倭が昼夜を問わず往来していた。三浦と都の漢陽では、通交倭人の経済的な欲求を満たすだけの経済的な基盤や交易システムが構築されていった。

日朝貿易の形態は、大きく A) 進上と回賜、B) 公貿易（官貿易）、C) 私貿易に分けられる。<sup>9)</sup> いずれの貿易も次第にその規模が拡大していき、日本からは日本産・東南アジア産の物品、朝鮮からは朝鮮産・中国産の様々な物品が取り引きされていた。特に使送倭人との間で行われる A)・B) は時折、朝鮮政府の財政問題になるほどその規模が膨らんでいった。1486年の朝鮮朝廷では、倭人の進上品に対する政府の回賜が年に（布帛で）50万匹を下らず、国家の2年の収入をもって1年の歳費を支えることができないと憂慮している。<sup>10)</sup> また、C) の場合は朝鮮の禁令を蔑ろにして定められた関限を越え、浦所

の周辺地域において朝鮮商人と交易したり、禁物を交易したりするなどの違法行為が絶えなかった。朝鮮政府は何よりも交易の際に国家機密が漏洩されることを危惧していた。<sup>11)</sup>

三浦のうち、もっとも通交者数が多く賑わいを見せていたのが齊浦で、次いで釜山浦、塩浦の順であった。

北部九州から朝鮮半島へ渡航する際、宍岐→対馬→朝鮮南部沿岸というのが一般的な航路であった。距離的にもっとも近い浦所は釜山浦であったが、図-2・3のように15・16世紀の釜山浦は洛東江の支流に位置していたため、船の接岸が難しい時があった。そのため、比較的距離はあるが、スムーズに接岸できる齊浦への停泊が多く行われていた。

1510年に三浦の乱が勃発したことにより、三浦体制は幕を閉じた。当該期、対馬は島内財政の大部分を朝鮮通交に頼っていたため、死活問題に陥った。これを打開すべく乱後、対馬側は足利将軍や大内氏などの名義を盗用して使節を派遣し通交の復活を図った。<sup>12)</sup> やがて1512年に日朝間に〈壬申約条〉が締結され、対馬は乱前の朝鮮関係諸権益が大幅に縮小されたものの、再び朝鮮通交が可能になった。この際、浦所は齊浦一カ所に限定され1517年に釜山浦が追加された。<sup>13)</sup>

しかし、1544年4月に慶尚道の統営において蛇梁の倭変が起こった際、再び齊浦と釜山浦が閉鎖された。その後、1547年に〈丁未約条〉が締結され通交は回復したが、齊浦は開港されず、浦所は釜山浦一カ所だけとなった。

このような釜山浦一浦体制は、豊臣秀吉による文禄・慶長の役（1592～98年）が勃発するまで続いたが、浦所としての釜山浦の復活は17世紀はじめ日朝間の国交が回復するまで待たねばならなかった。

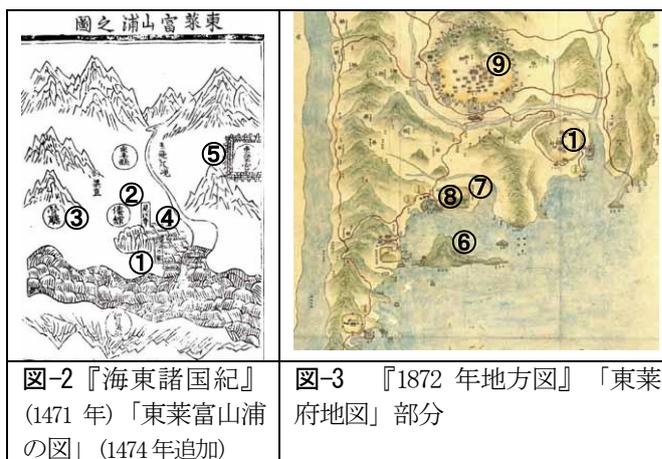


図-2 『海東諸国紀』（1471年）「東萊富山浦の図」（1474年追加）  
図-3 『1872年地方図』 「東萊府地図」部分

\*①15・16世紀の釜山浦、②倭館、③営庁、④恒居倭集落、⑤東萊官、⑥絶影島、⑦豆毛浦、⑧草梁倭館、⑨釜山鎮城

## (3) 17～19世紀の釜山浦

足かけ7年に及ぶ秀吉の朝鮮出兵は、14世紀末から

続いていた日朝間の交隣関係を踏みにじり、朝鮮はもちろん、明に対しても大きな打撃を与えた。

この戦乱によって、もう一カ所甚だしい被害を被った地域を挙げるとすれば、それは国境の島・対馬である。前述したように対馬の経済は、朝鮮通交を順調に行ってこそ成り立っていたと言っても過言ではない。対馬島主宗義智は当初、朝鮮と一戦を交えることは何としても回避しようと努めていた。しかし、秀吉の意志は固く兵士の動員をはじめ、壱岐とともに唐津の肥前名護屋城から朝鮮へ渡海する日本軍勢の中継地としての役割を強いられた。<sup>14)</sup>宗氏には秀吉から図-1の巨濟島を与えられることが約束されていたが、秀吉の死によって何ら成果なく日本軍が撤退したことで空約束になってしまった。<sup>15)</sup>

戦後、日本の誰よりも早く朝鮮との関係改善を切実に願ったのが他でもない対馬島主宗氏であった。早速、使節に朝鮮の被虜人を付して派遣し、通交回復を試みたが、なかなか埒が明かかなかった。しかし、朝鮮側も戦後処理や復興のためには国防上の負担を軽減しなければならない状況であった。また、徳川家康も1600年の関ヶ原の戦いの以前から宗氏に対して朝鮮との関係復活を命じていたとも言われる。<sup>16)</sup>

以上のような日本側の積極的な動きに対して朝鮮政府がその真意を探るべく1602年はじめに対馬に使者を派遣した。<sup>17)</sup>ようやく通交回復の兆しが見えてきたと判断した対馬側はチャンスを逃さないため、被虜人を掻き集めて頻繁に朝鮮へ使節を派遣し、通交復活を望んだ。

このような状況のなかで国交回復につながる決定的な契機となったのは、1604年8月に朝鮮政府が派遣した松雲大師惟政と徳川家康との会見が翌年春に伏見城で実現したことである。この場で惟政は、再侵の意志がなく朝鮮と和を結びたいという家康の意向を確認したのである。これにより朝鮮は日本との国交回復に乗り出し、李王家と徳川家との間に新たな交隣関係を成立させた。

この間、来朝する日本使節の接待のために1601年に図-1・3に見える釜山の絶影島（影島、牧ノ島）に倭館（古倭館ともいう）が設置された。絶影島倭館は「仮倭館」「臨時倭館」と呼ばれたように通交復活交渉のために来朝する使節を接待する目的で朝鮮政府が仮に設けた倭館であった。<sup>18)</sup>しかし、1601年11月の記録によれば、絶影島倭館においてすでに貿易が行われており、<sup>19)</sup>本来の倭館の姿を取り戻しつつあった。

日朝間に国交回復交渉の進展にともない、1606年から正式な倭館の必要性が生じた。正式な倭館を設置する位置については日朝間に意見の相違はあったが、1607年春に釜山鎮の西側へ5里離れたところに豆毛浦倭館を設置する運びとなった（図-3参照）。<sup>20)</sup>

豆毛浦に正式に倭館が設置された翌年のはじめから対

馬側は日本国王（徳川将軍）の名義で朝鮮に遣使し、日朝間（特に朝鮮と対馬間）に戦前に結ばれていた約条の改正を有利に展開させようと図った。結局、このような対馬側の努力や朝鮮が置かれていた国際環境が相まって1609年5月に〈己酉約条〉が締結された。これは、癸亥（1443年）・壬申（1512年）・丁未（1547年）の三つの約条に由来するもので、朝鮮通交上の制限がさらに強化されたものであったが、対馬の朝鮮通交が正式に承認されたのである。<sup>21)</sup>江戸時代の対馬藩主宗氏は、日朝両国の中央政権から認められ、唯一の対朝鮮通交者としての地位を固め、朝鮮貿易も独占するようになった。

ただし、戦前には使送倭人に対する上京が許され、都における外交交渉や貿易が行われていたが、戦後は日本人の上京は原則的に許されなくなった。したがって、戦後の倭館は日朝貿易はもちろん、外交交渉を行う公館の役割が一層増していたのである。

1637年になると「兼帯の制」が実行され、新たな通交システムが確立した。すなわち、従来は外交と貿易が一体化されていたが、それを分離することで使節に対する朝鮮側の煩雑かつ費用のかかる応接儀礼を減らすことができたのである。<sup>22)</sup>朝鮮政府は、形式的な外交儀礼を取り除き、日本側の通交目的に鑑み、双方にとっての実利を選択したのである。

表-2 朝鮮時代の浦所と倭館の変遷

年度	都の倭館	薺浦	釜山浦	塩浦	備考
1407		○	○		興利倭人に浦所指定
1409	○	○	○		都に東平館と西平館を造る
1420	○	○	○		少なくとも1420年正月まで使送倭人に浦所指定
1426	○	○	○	○	塩浦が追加→三浦となる
1510	○				三浦の乱勃発
1512	○	○			壬申約条締結→薺浦開港
1517	○	○	○		釜山浦追加開港
1544	○	○	○		蛇梁の倭変勃発→将軍・大内・少式の使節は渡航許可
1547	○		○		丁未約条締結→釜山浦開港
1592					文禄・慶長の役勃発
1601			○		絶影島倭館（仮倭館）
1607			○		豆毛浦倭館（古倭館）
1678			○		草梁倭館（新倭館）

\*使節の接待と貿易を行う場として浦所倭館が正式に制定されたのは、応永の外寇（己亥東征）直後、少なくとも1420年正月までのことであった（参考文献11）李泰勳論文）。

次第に日朝間の貿易規模が拡大するに連れ、「狭い」「不便」「環境が悪い」ということで豆毛浦倭館に対する対馬側の不満が高まった。<sup>23)</sup>1640年頃から対馬側によ

る倭館移転交渉が本格的に開始された。そうとはいえ、倭館をあくまでも外交使節の接待所として位置付けていた朝鮮政府がすんなり移転を許可するはずがなかった。移転にともなう莫大な費用を朝鮮側が負担しなければならぬ経済的な理由も大きかったからである。

しかし、対馬側の執拗な要請が功を奏し、やがて1675年から工事ははじまり1678年に総面積10万坪といわれる草梁倭館（新倭館）への移転が行われた。<sup>24)</sup> これから1876年、明治政府に接收されるまで、日朝間の外交と貿易の正式舞台として役割を遂行したのである。なお、表-2は本節でとりあげた中・近世の朝鮮に設けられた浦所と倭館の変遷をあらわしたものである。

### 3. 上長安窯址とその遺物

釜山浦に近接する機張地域は、その地理的要件から中・近世の日朝交流に少なからざる関係をもっていたといわれている。特に近年、韓国の地方自治体では歴史的な文化資源に対する関心が高まり、古窯址に対する地表調査や発掘調査が積極的に行われ、歴史・美術史・陶磁史・陶芸などの関連学から注目を浴びている。

とりわけ、上長安窯は15・16世紀に操業し、主に粉青沙器（以下、粉青と略する）を生産した窯として注目され、発掘調査が行われ多数の遺物が収集された。

朝鮮の粉青は、高麗末（14世紀後半）の青磁から朝鮮前期（1392～1592年）の白磁への移行期に約200年間にわたって様々な技法で作られていた。このような粉青が、西日本各地、特に地理的に近い北部九州の中世遺跡群から大量に出土している。<sup>25)</sup>

上長安窯の遺物は当該期、日朝間の陶磁交流を考察する上できわめて貴重な資料であるので、本節ではそれらに関して考察してみたい。



図-4 上長安窯址と周辺地域

#### (1) 上長安窯址の位置と景観

図-4は、図-1の機張の長安邑所在の上長安窯址を中

心に拡大したものである。長安邑は、太白山脈の支脈である大雲山脈の山麓に位置し、北は蔚山の蔚州郡、西は梁山、南は機張邑に接し、その南が釜山の海雲台である。窯址は上長安村から長安寺（673年創建）方面に100mほど進むと右側に位置する。

周辺の山林地帯は北風や東・南側からの海風を遮り、また豊富な薪を提供していた。窯址の西北に位置する仏光山の溪谷から流れる水は長安川に合流し、上長安窯のすぐ西側を経て東海に流れる。また、窯址のすぐ東側にもYangjisa沼溜池があり、窯を営む上で十分な水源が確保できていたと見られる。さらにこの水路を使って製作した陶磁器を東海に搬出することもでき、交通の便も良い地域であった。

次に土であるが、調査区域内で黄褐色・赤褐色・灰褐色の砂質粘土層が確認されており、<sup>26)</sup>また機張地域内の長安、大辺、安坪などで現在も白土が広い範囲で分布していることから、<sup>27)</sup>窯を営む上で十分な土が確保できていたと考えられる。

#### (2) 遺物に対する考察

上長安窯址に対する調査は、機張陶芸村造成にともない、機張郡の依頼で釜山博物館が2009年9～12月に機張郡長安邑山48-1と48-5の林野を含む18,399㎡を対象に発掘調査を行った。<sup>28)</sup>

窯址からは、「蔚山仁壽府」「蔚山長興庫」「慶州長興庫」などの銘が刻まれた粉青沙器片が確認された。<sup>29)</sup> 下線部は陶磁器を生産した地名で、波線部はその地域から陶磁器を納めた官庁名である。現在、機張郡は釜山市に属しているが、『世宗実録地理志』（1454年）「機張県」条をみると高麗の顕宗戊午年（1018）に「蔚州」の属県となっている。また、1413年に至って「蔚州郡」を「蔚山郡」に改めている。さらに「慶州長興庫」とあるのは、『世宗実録地理志』の段階で「蔚山郡」が「慶州府」に属しているの、<sup>30)</sup>慶州の管内ということで表示したものと解される。

貢納用の粉青に「長興庫」をはじめとする官庁名を刻み始めたのは1417年からであるが、<sup>31)</sup>これは貢納用の陶磁器の盗用と私蔵を防ぐためであった。<sup>32)</sup>

『慶尚道統撰地理志』（1469年）「蔚山郡」条には「陶器所・磁基所皆在郡南長安里峴品下」とあり、陶器所と磁器所が長安にあったことが確認できる。上長安窯が国家の管理の下で焼き物を生産した官窯であったといわれる所以である。<sup>33)</sup>

遺物の殆どが粉青であり、大皿と小皿が大部分を占めるが、その他に小鉢、杯、瓶、蓋、壺などがあり、特殊器種としては、念珠と念珠陶枕をはじめ高足杯、香碗、盒、各種の祭器片、硯、杖鼓などがある。<sup>34)</sup>

焼成方法は、匣鉢（さや）を用いて製作したのもも少量確認されているが、器物の間に耐火土目や砂を3・4個ずつ挟んで重ね焼きをしたのが主流をなしている。<sup>39</sup> おそらく貢納用の粉青は匣鉢を用い、重ね焼きしたのは日常雑器として使用する目的で生産したのであろう。

粉青を製作技法別にみると写真-1・2のように印花と刷毛目技法が大部分を占め、特に器物の内面は印花文で外面は刷毛目技法で製作したものが目立って多い。これは、15世紀後半から16世紀前半に慶尚道地域の粉青窯址でよく見られる作風で、衰退期の印花粉青の特徴的な製作技法である。<sup>39</sup>

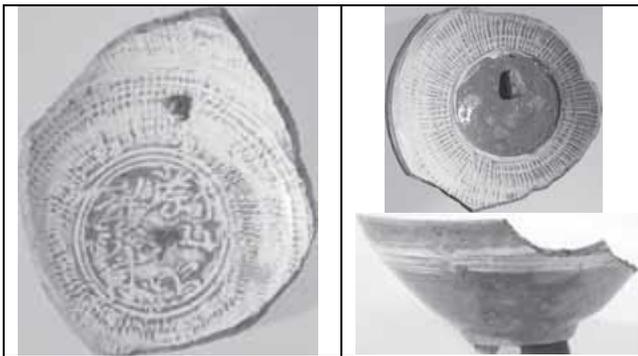


写真-1 「蔚山仁寿府」銘の印花粉青片

写真-2 内面は印花文、外面は刷毛目粉青

\*写真-1・2は、上長安窯出土品  
\*参考文献1)釜山博物館・釜山広域市機張郡の報告書。



写真-3 対馬の水崎（仮宿）遺蹟の印花粉青  
\*写真撮影筆者



写真-4 上長安窯址の印花粉青を再現する様子  
\*参考文献39) 報告書, p. 89.

### (3) 日本への伝来

李宗峯氏は、機張地域の窯で生産された陶磁について、鎮海の熊川窯の製品が齋浦を通じて日本に流通したと見なし、機張の陶磁も釜山浦や塩浦を通じて日本へ流通したと推測している。<sup>39</sup> また李氏は、朝鮮後期の倭館から朝鮮側に陶工の派遣要請をした際に機張の沙器匠が派遣されたとし、草梁倭館で機張の陶磁が取り引きされた可

能性が高く、機張の陶芸が倭館窯（釜山窯）に一定の影響を与えていたと推測している。<sup>39</sup> ただし、李宗峯氏の研究は具体的な根拠を示しておらず、推測に過ぎないものである。

近年、地表調査や発掘調査が行われているので、推測の域を越えたより具体的な検討が可能になった。また、日本でも早い段階から当該期に朝鮮半島と盛んに交流を行っていた北部九州の中世遺構に対して発掘調査が行われ、多くの資料が確保されている。これらを総合検討することで文献資料では知り得ない日朝陶磁交流の一端が把握できよう。

写真-1・2 は上長安窯で出土した印花粉青で、写真-3 は、筆者が2013年11月に対馬市教育委員会のご配慮で直接、対馬の水崎（仮宿）遺蹟の遺物を調査した時に撮影した印花粉青片である。一見するだけでは類似点が判りにくいかも知れないが、双方の印花文が非常に似ている。

印花粉青の場合、同一の窯で大・小の碗や皿などを製作する際、作業の効率性を高めるため、a) 器物の規格化、b) その器物に一致するスタンプ（印花文）を予め用意していたと思われる。実際に韓国の粉青沙器窯址から出土した印花粉青をみると印花の文様とその間隔が均一に押されているものが容易に確認できる。

ところで、写真-1・2・3 をみるとその均一性が認められず、印花の文様も特異な形状をしている。上長安窯址では、このような印花粉青が多数確認されている。

近年、機張地域の印花粉青について大変興味深い研究が発表されている。機張郡の支援を受けて韓国の東釜山大学陶芸研究所（所長：金炫式教授）が機張地域の古窯址を地表調査し、その際に収集した遺物や土を分析して伝統的な技法で粉青を再現する研究を試みた。<sup>39</sup> そこで、上長安窯址の印花粉青を再現する際に写真-4 のように灰貝殻を用いて、見事に再現している。

このように上長安窯の印花粉青は規格化されたスタンプを押していたのではなく、陶工が貝殻を用いて一つ一つ文様を付けていたのである。このため、他の粉青沙器窯址からはあまり見られない形状の印花文が不均等に押され、写真-1・2・3 のような印花粉青が製作されたのである。

筆者は前稿で、鎮海の熊川陶窯址と齋浦、そして対馬の水崎（仮宿）遺蹟から出土した朝鮮の粉青を取りあげ、日朝陶磁交流について検討した。そこで、上長安窯が操業していた15・16世紀にもっとも朝鮮通交を活発にしていた対馬の人々により、朝鮮の粉青が貿易品として対馬を経て日本本土、特に博多へもたらされていたことを指摘した。<sup>40</sup>

上長安窯の粉青もやはり地理的に近い釜山浦や塩浦を経て対馬の尾崎地域に運ばれ、同じく博多にもたらされたと考えられる。

なお、上長安窯址周辺には下長安粉青沙器窯址、五里 Sin-ri 青磁窯址、五里 Pan-gok 甕器窯址、五里 Dae-ryong 粉青沙器窯址、龍所里白磁窯址などがあり、機張一帯で盛んに陶磁器が作られていたことがわかる。

#### 4. おわりに

以上で検討したように機張は、1510年の三浦の乱まで三浦のうち、釜山浦と蔚山の塩浦に近接していた地域である。特に釜山浦は、概ね15世紀はじめから19世紀まで朝鮮の対日窓口の役割を遂行しており、多くの日本人が貿易を行うため往来していた。

上長安窯をはじめとする機張地域の古窯について、従来からその地理的な要件および近世の釜山浦の倭館窯（釜山窯）との関わりが大きくクローズアップされ、日朝間における陶磁や陶芸交流に関連付けられていたが、未だ具体的な根拠は示されていない。

本稿では、15・16世紀に朝鮮通交をもっとも盛んに行っていた対馬に着目し、同地の水崎（仮宿）遺物と上長安窯址の遺物を比較検討した。

上長安窯址で多く出土した作例として、写真-1・2の15世紀後半以降に慶尚道地方で盛んに製作された印花粉青があり、内側には印花文で装飾を付け、外側は刷毛目技法で製作した粉青が多く確認できた。

特に印花の文様が機張以外の他地域ではあまり見られない特異な形状をしており、韓国の東釜山大学陶芸研究所の研究によれば、灰貝殻で付けた文様だという。この文様とほぼ一致する印花文が施されている印花粉青が対馬の水崎（仮宿）遺跡で出土しており、実際に双方間に陶磁交流が行われていたことを裏付けることができた。

上長安窯が操業していた15・16世紀に対馬の通交者は機張に近接する釜山浦や塩浦を通じて、上長安窯の粉青を貿易陶磁として対馬へもたらし、さらに日本本土、なかでも博多に運搬して貿易していたと思われる。

15・16世紀の日朝陶磁交流を究明するためには北部九州の中世遺跡群で発掘された朝鮮の粉青について、今後さらなる検証が必要であろう。

**謝辞：** 本稿は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成24年度～平成26年度）「北部九州の窯業に着目した文化的景観の形成と保全に関する研究」

（研究代表者：九州産業大学 山下三平教授）による研究成果の一部である。現地調査の際、東釜山大学の金炫式教授、東義大学の白泰昊教授、「釜山窯」の金榮吉先生、対馬市教育委員会文化財課の田中敦也副参事兼

係長からご協力とご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表する。

#### 参考文献

- 1) 許善英「14～15世紀の釜山 機張地域 陶芸 研究」（東亜大学校大学院 考古美術史学科 博士学位論文、2007）。釜山大学校韓民族文化研究所「朝鮮時代機張 陶芸史」（『韓民族文化研究』33, 2009）。釜山博物館・釜山広域市機張郡「機張 上長安遺蹟」（『釜山博物館学術論叢』32, 2011）。釜山博物館・釜山商工産業団地開発（株）「機張 下長安遺蹟」（『釜山博物館学術論叢』40, 2013）。
- 2) 『世宗実録』21年10月丙申（21日）条。
- 3) 長節子「倭寇懐柔政策と興利倭船」（『中世 国境海域の倭と朝鮮』吉川弘文館、2002）。
- 4) 中村栄孝「浦所の制限と倭館の設置」（『日鮮関係史の研究』上、吉川弘文館、1965）。
- 5) 前掲4) に同じ。
- 6) 李泰勳「三浦恒居倭に対する朝鮮の対応—課税案と課税を中心として—」（『年報 朝鮮學』10, 2007）。
- 7) 村井章介『中世倭人伝』岩波新書、1993。李泰勳「朝鮮三浦恒居倭の法的位置—朝鮮・対馬の恒居倭に対する『検断権』行使を中心に—」（『朝鮮学報』201, 2006）。
- 8) 『世祖実録』元年（1455）12月己酉（8日）条。
- 9) 前掲7) 村井章介著書、p.127。
- 10) 『成宗実録』17年（1486）11月辛亥（10日）条。
- 11) 李泰勳「朝鮮前期〈齋浦〉からみた日朝交流」（『九州産業大学 国際文化学部紀要』57, 2014）。
- 12) 田中健夫「中世日鮮交通における貿易権の推移」（『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会、1959）。
- 13) 長節子「壬申約条後の釜山浦再開港時期について」（李泰勳・長節子「朝鮮前期の浦所に関する考察」『九州産業大学 国際文化学部紀要』34, 2006）。
- 14) 中村栄孝『日鮮関係史の研究』中、吉川弘文館、1969。中野等『戦争の日本史16 文禄・慶長の役』吉川弘文館、2008。
- 15) 鶴田啓『対馬からみた日朝関係』山川出版社、2006。
- 16) 前掲15) 鶴田啓著書。
- 17) 『宣祖実録』35年（1602）正月庚戌（17日）条。
- 18) 張舜順「조선후기 왜관의 성립과 왜관정책」（『人文科学研究』31, 江原大学校人文科学研究所、2001）。
- 19) 『宣祖実録』34年（1601）11月戊午（24日）条。
- 20) 前掲18) 張舜順論文。
- 21) 中村栄孝『日本と朝鮮』至文堂、1966, pp.210-212。
- 22) 「兼帯の制」については、田代和生『倭館-鎖国時代の日本人町-』（文藝春秋、2002）を参照した。
- 23) 前掲22) 田代和生著書。

- 24) 前掲 23) に同じ. 前掲 18) 張舜順論文.
- 25) 大庭康時編『中世都市・博多を掘る』海鳥社, 2008.  
片山まび「高麗・朝鮮時代の陶磁生産と海外輸出」  
(アジア考古学四学会編『アジアの考古学 1 陶磁器流通の考古学—日本出土の海外陶磁—』高志書院, 2013). 李泰勳「熊川陶窯址와 水崎(仮宿)遺蹟에서 본 朝日交流」(『韓日關係史研究』48, 2014).
- 26) 前掲1) 釜山博物館・釜山広域市機張郡の報告書, p. 7.
- 27) 李宗峯「조선시대 기장지역의 도자기 생산과 의미」(『韓國民族文化』33, 2009).
- 28) 前掲1) 釜山博物館・釜山広域市機張郡の報告書.
- 29) 前掲1) 釜山博物館・釜山広域市機張郡の報告書, p. 175.
- 30) 『世宗実録地理志』「慶尚道, 慶州府, 蔚山郡」条.  
『新增東国輿地勝覽』卷22, 「蔚山郡」条.
- 31) 『太宗実録』17 (1417) 4月丙子 (20日) 条.
- 32) 長興庫の他に恭安府, 敬承府, 仁寧府, 德寧府, 仁壽府, 内資寺, 内瞻寺, 礼賓寺などの納付官庁名と貢納する地方名が刻まれていた. 地方名としては, 高靈, 陝川, 慶州, 蔚山, 星州, 慶山, 密陽, 昌原, 梁山, 晋州などが確認されており, 大部分を慶尚道地域が占める (田勝昌「조선 전기의 도전과 위엄, 분청사기와 백자」国史編纂委員會『한반도의 흙, 도자기로 태어나다』景仁文化社, 2010, p. 254・255.) .
- 33) 前掲1) 論文および報告書.
- 34) 前掲 1) 釜山博物館・釜山広域市機張郡の報告書, p. 174.
- 35) 前掲 34) に同じ.
- 36) 姜敬淑『韓國のやきもの—先史から近代, 土器から青磁, 白磁まで』淡交社, 2010, p. 144. 参考文献  
25) 李泰勳論文.
- 37) 前掲27) 李宗峯論文.
- 38) 前掲37) に同じ.
- 39) 機張郡・東釜山大学陶芸研究所『機張 陶芸研究 및 데이터베이스 構築—補助事業結果報告書—』東釜山大学陶芸研究所, 2010.
- 40) 前掲25) 李泰勳論文.